

医療とお金。考えるにも面倒な組み合わせです。
抗がん剤の高額薬価が一時期社会を賑わせました。
ニボルマブに代表される免疫チェックポイント阻害薬はその医学的な達成度とは別に、
経済的・社会的意義を問われる薬となったのです。
「費用対効果」という耳慣れた言葉が各学会や専門誌上で飛び交い、
国の薬価制度見直しまでその影響力を及ぼしました。
結果、ニボルマブの薬価は半額となり、コスト問題はその姿を消していきます。
しかし、このコスト問題は本当に収束したのでしょうか？
そもそも医療における「費用対効果」とは？
ニボルマブが私たちに突き付けた医療コスト問題は、
これまでの「医療とお金」のパラダイムを一変させたように思えます。
そこで本特集では、「がん診療のコスト原論」と題し、このコスト問題を今一度考え直します。
医療経済の歴史から、そして現場の視点から、または社会学の知見から。
この原論をもとに、これからのがん診療を考えてみたいのです。

Feature July 2017 Topic

がん診療のコスト原論

費用対効果とは？

後藤 励 (慶應義塾大学大学院 経営管理研究科)

薬価制度と費用対効果

五十嵐 中 (東京大学大学院 薬学系研究科医薬政策学)

薬剤師の視点

清水久範 (昭和大学病院 薬局)

QOLとコスト

齋藤信也 (岡山大学大学院 保健学研究科)

倫理とコスト

下妻晃二郎 (立命館大学 生命科学部)

ケアと資本主義

立岩真也 (立命館大学大学院 先端総合学術研究科／生存学研究センター)

臨床の立場から

國頭英夫 (日本赤十字社医療センター 化学療法科)